

項目		内 容	実 績									
1. 国内	生 産	(1) 生産・処理動向調査（（一社）日本食鳥協会10月下旬実施）によると、10月の推計実績は、処理羽数61,997千羽（前年比101.8%・処理重量184.8千t（同102.7%）と羽数・重量とも前年を上回り、前月時点の計画値（処理羽数同101.7%・処理重量同102.1%）並となった。台風15号の影響等で関東地区が羽数同96.1%・重量同95.2%と前月時点の計画（羽数同97.2%・重量同97.2%）より約1～2%下回ったものの北海道・東北地区が重量で同105.6%と大きく上回った。なお、生鳥処分は廃棄合計3.18%（前年差△0.01%）となっている。	生産状況 単位：千羽、千トン、%									
		(2) 11月～1月計画では、11月は処理羽数（同102.5%）・処理重量（102.6%）、12月も処理羽数（同102.5%）・処理重量（同102.9%）と、当初台風等の影響で下振れも予想されたが、前月時点の計画と同様に前年を上回る計画となっている。この結果、2019年の年間合計で出荷は処理羽数で2.1%増の7億11,130千羽、処理重量で2.6%増の211万9,907千tとなる見通しとなった。また1月については処理羽数（同104.3%）・処理重量（同104.2%）と10月の入雛が前年比104.0%と増加していることもあり、現時点では大きく上回る計画となっている。令和2年も各産地の増羽意欲は強いと思われ、潤沢な供給に対する需要拡大策が課題になる年と考えられる。	※参考資料：全国食鳥新聞発行「PMN」									
2. 輸入	産 出	(1) 財務省が11月28日に公表した貿易統計によると、10月の鶏肉（原料肉）輸入量は51.6千t（前年比94.8%）で、日本食肉輸出入協会の予測（47.3千t）を約4.3千t上回った。8月末の未通関分が9月輸入に加工わったとみられる。国別ではブラジルが予測を約2.0千t上回る37.7千t（同96.6%）、タイも約1.5千t上回る12.0千t（同89.8%）となった。同協会（11月19日取り纏め）によると11月46.2千t（同107.0%）・12月44.6千t（同94.9%）と予測されており、「ブラジル産、タイ産といずれも中国からの引き合いなどから価格が高く、満杯にある倉庫事情もあって、今ある国内の現物を優先する動きとともに、米中貿易協定で中国は米国産鶏肉の輸入を解禁するという動きから、今後のブラジル産、タイ産の価格がどうなるか注目される」とコメントしている。しばらくは、アジア地区におけるASF等の影響、特に豚肉・鶏肉が絶対的に不足とされている中国の動向が注目される。	輸入動向 単位：千トン、%									
		(2) 鶏肉調整品の10月輸入量は45.5千t（前年比90.1%）と、前月よりは4.4千t増加した。中国産は、ほぼ横ばいの15.6千t（同81.0%）、タイ産が約4.0千t増の25.7千tも前年比では95.2%と下回った。1～10月累計では420.4千t（同100.7%）となっている。中国においてはASFの影響で一部自国向けに回っているとの報告もあり、月によって多少の増減がありつつもこの傾向は続くものと考えられる。	※参考資料：全国食鳥新聞発行「PMN」、全国食鳥新聞									
1. 家計消費	需 要	(1) 総務省統計局発表の家計調査報告によると、9月は、全国一世帯当たりの3畜種生鮮肉の消費（購入）数量は3,525g（前年比95.9%）、金額は5,240円（同95.0%）となった。消費増税前の駆け込み需要で生鮮食料への支出は抑えられたのに加え、台風等による天候不順や気温が平年より高く、秋物商戦が不振等で全体的に低調であった。牛肉は数量（同90.4%）・金額（同93.7%）とも前年を下回った。豚肉も数量（同95.8%）金額（同95.8%）とも下回った。鶏肉についても他畜種同様で購入頻度（同97.5%）・数量（98.2%）・金額（同95.4%）とも下回った。	鶏肉の消費動向（2人以上の世帯） 単位：グラム、円、%									
		(2) 食品関連スーパー3団体の販売統計速報によると、10月の食品売上高は全店ベースで前年比100.6%と上回ったものの、生鮮3部門の売上高は全店ベースで前年比99.5%・既存店ベースでも同97.8%と厳しい状況が続いている。畜産部門の売上高は1,084億円で全店ベース（同102.0%）、既存店ベース（同99.9%）とも前年並み。「牛肉は相場高が続いており、平年より高い気温により焼肉・ステーキ用の動きはよくなったものの全体的に伸び悩んだ。豚肉は鶏肉需要低迷の影響を受けたが、CSF（豚コレラ）の影響で単価は上昇しており前年並みとなった。鶏肉は屠揚げ用を中心に好調となった店舗が多い。台風接近による備蓄需要の追い風を受け加工肉が好調となった店舗もみられた。」と報告されている。惣菜部門（同100.9%・同99.7%）は好天に恵まれた地域は好調、台風の影響を受けた地域は買いだめ需要はあったもののイベント中止等で打撃を受けた店舗もありと好不調わかれる状況となっている。	※参考資料：総務省統計局HP									
3. 業務・加工筋	要 求	(1) 日本ハム・ソーセージ工業協同組合調べによる9月度の鶏肉加工品仕向肉量は、前年比105.4%の4,648千tとなった。うち国内物は同108.0%の3,885千tと前年を上回ったが、輸入物は同93.9%の0.763千tと下回った。1～9月累計合計では同103.7%の41,378千tと前年を上回っている。鶏肉加工品は10月以降も年末に向け需要が増加すると考えられ、国産むね肉価格が比較的低位で安定していることで国産比率が高まっており、さらに国産物での製造量増加を期待したい。	在庫状況 単位：千トン、%									
		(2) 11月は前月比で生産量は3.9千t減少、輸入量もブラジル中心に101千t減少、出荷量も4.8千t減少することから期末在庫は国産・輸入品合計で2.6千t増加の169.8千t（前年比102.2%）と予測されている。12月は生産量は14.8千t増加、輸入量は1.6千t減少、出荷量は15.3千t増加するも、在庫は0.4千t増加の170.2千t（前年比106.8%）と前年を上回る予測となっている。	※実績参考資料：畜産日報、農畜産業振興機構									
1. 令和元年9月	在 庫	(1) 推計期末在庫は国産29.9千t（前年比107.4%・前月差+1.1千t）、輸入品134.5千t（同99.6%・同+6.3千t）と合計で164.3千t（同100.9%・同+7.3千t）となった。生産量が1.3千t減少し、輸入量が3.1千t増加した。国産品の出荷量が生産量を下回ったため、国産品の在庫が増加した。輸入品は出荷量が約2.5千t減少の47.4千tとなったため前月より増加したものの、前年比でも99.6%と同水準となった。	相 場（年別・暦年） 単位：円									
		(2) (独)農畜産業振興機構の需給予測（11月27日公表）では、10月は国内生産量が前月比で約16.7千t増加、輸入量は前月比で約6.3千t減少、出荷量は前月比で約15.1千t増加するものの、生産量を下回るため期末在庫は約167.2千tと前月より増加し前年比でも100.2%と上回る見通しとなっている。	※参考資料：総務省統計局HP									
2. 見通し	庫 存	(1) (独)農畜産業振興機構の需給予測（11月27日公表）では、10月は国内生産量が前月比で約16.7千t増加、輸入量は前月比で約6.3千t減少、出荷量は前月比で約15.1千t増加するものの、生産量を下回るため期末在庫は約167.2千tと前月より増加し前年比でも100.2%と上回る見通しとなっている。	在庫状況 単位：千トン、%									
		(2) 11月は前月比で生産量は3.9千t減少、輸入量もブラジル中心に101千t減少、出荷量も4.8千t減少することから期末在庫は国産・輸入品合計で2.6千t増加の169.8千t（前年比102.2%）と予測されている。12月は生産量は14.8千t増加、輸入量は1.6千t減少、出荷量は15.3千t増加するも、在庫は0.4千t増加の170.2千t（前年比106.8%）と前年を上回る予測となっている。	※実績参考資料：畜産日報、農畜産業振興機構									